

人とゴリラが接近する「危険」な映像が視聴者の興味を引くことを解明

－YouTube 動画の内容と視聴者の反応の分析－

概要

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程大学院生 大塚亮真（日本学術振興会特別研究員）、山越言 同教授の研究グループは、マウンテンゴリラ（以下、ゴリラ）のエコツーリズムに関連する YouTube 動画の内容を分析して、人とゴリラの近接映像は視聴者の興味・関心を惹きやすいことを示しました。

いま、人と野生動物との距離がどうあるべきかが問われています。マウンテンゴリラのエコツーリズムは、ゴリラの保全活動に大きく貢献してきました。その一方で、エコツーリズムによって人とゴリラが近づくことで、人獣共通感染症のリスクが増大することが懸念されています。本研究では、ゴリラのエコツーリズムに関連する YouTube 動画を用いて、人とゴリラの近接と視聴者の反応との関係を調べました。その結果、人とゴリラの近接を含む映像が、より多くの視聴回数と「いいね数」を得ていることが明らかになりました。本研究は、エコツーリズムを通じた人とゴリラとの距離のあり方とゴリラ保全に、インターネットメディア上の映像が負の影響を及ぼす可能性について指摘した点で重要な成果です。

本研究成果は、2020 年 5 月 21 日に国際学術誌「PLOS ONE」のオンライン版に掲載されました。



(イラスト：山本修路)

1. 背景

いま、人と野生動物との距離がどうあるべきかが問われています。昨今大きな話題となっているエボラウイルスや新型コロナウイルスも、きっかけは野生動物から人への感染であるという見解が有力であります。人から野生動物へうつる感染症も、とくに大型類人猿の保全にとっては大きな問題です。人と野生動物が物理的に接近する現象のひとつとしてエコツーリズムがあります。エコツーリズムは、生物多様性の保全に貢献することが望ましいとされていますが、感染症のリスクなど、対象となる野生動物の保全に負の影響を与えることも少なくありません。このような負の影響をいかに軽減できるか、ということが重要な課題となっています。

ウガンダ共和国、コンゴ民主主義共和国、そしてルワンダ共和国の熱帯雨林で実施されているマウンテンゴリラ (*Gorilla beringei beringei*) (以下、ゴリラ) のエコツーリズムは、非常に高い人気を誇り、高額な参加費が必要であることでも有名です。この地域では、エコツーリズムは絶滅危惧種であるゴリラを保全するための保全資金の創出に欠かせません。さらに、地域経済の発展や自然保護区と地域住民の関係改善にとっても重要です。しかしながら、エコツーリズムによって人とゴリラが「密」に近づくことで、人からゴリラへ、あるいはゴリラから人へと、感染する人獣共通感染症のリスクが懸念されてきました。病気感染のリスクを軽減するためのルールが定められており、原則として観察中は人とゴリラとの間に 7m 以上の距離を保つことが義務化されています。しかし、このルールが厳密に守られてきたとはいえません (e.g. Sandbrook & Semple 2006 Oryx)。この背景には、より近づいてゴリラを観察したい、あるいは写真撮影や動画撮影がしたい、という人の期待や欲望が潜んでいると考えられます。現場の状況改善のためには、そのような観光客の期待や欲望とその成因についての深い理解が必要不可欠です。

では、観光客の期待は、どのように形成されるのでしょうか。これまで、映画やテレビ番組、観光ガイドブックなどの従来のメディアが、観光客の期待に大きな影響を与えてきました。そして近年の情報化社会では、ソーシャルメディアなどのインターネットメディア上に投稿された画像や動画等が、観光客の期待や観光イメージに与える影響が注目されるようになってきました。例えば、情報収集や体験の共有、そしてマーケティングの場等として、インターネットメディアは観光と密接に結びついています。ゴリラのエコツーリズムにおいても、観光客等が関連映像をインターネットメディア上に投稿して、将来的に観光客になり得る人々がそのような映像を目にしている可能性は高いと考えられます。

そこで本研究では、ゴリラのエコツーリズムに関する YouTube 動画の内容を分析して、その特徴を明らかにするとともに、人とゴリラとの近接が視聴者の反応にどのような影響を与えるかを検証することで、観光客の期待や欲望とその成因について理解を深めることができました。

2. 研究手法・成果

2019年4月某日に、YouTubeのウェブサイト上の検索機能を使って、ゴリラのエコツーリズムに関連する動画を検索し、合計282本の関連動画を特定しました。同日中に、チャンネル登録者数、動画がアップロードされた日付、動画の長さ、視聴回数、「いいね数」などの基本情報を記録しました。その後、人とゴリラとの近接距離やサムネイル画像に人とゴリラが映っているかどうかなどに着目して、YouTube動画を分類しました。

分析に用いた282本の関連動画のうち78%の動画で人とゴリラの両方が同時に映っていました。人とゴリラの近接距離については、18%の動画で人とゴリラの身体的接触が確認され、22%の動画で人またはゴリラの手が届く範囲での近接が、19%の動画で手の届く範囲ではないものの、規則で定められた7mよりは明らかに短い距離での近接が確認されました。また、サムネイル画像の種類に関しては、282本の動画のうち、15%の動画で人とゴリラの両方が、68%の動画でゴリラだけが映っており（人は映っていない）、そして17%の動画ではゴリラが含まれていませんでした。なお、これらの分類については、ランダムに選ばれた100本の

動画を用いて、2人の人が別々に分類をおこない、その分類が信頼に足るものであることを確認しました。

さらに、これらの YouTube 動画の特徴と視聴者の反応を示す指標（視聴回数と「いいね数」）との関係を明らかにするため、人とゴリラが同時に映っていた 206 本の動画を用いて統計学的分析を実施しました。その結果、動画のなかで人間とゴリラの身体的接触または手の届く範囲での近接がはっきりと確認された場合は、7 m 以内の近接が見られなかった場合と比べて、より多くの視聴回数と「いいね数」を獲得する傾向が確認されました。また、YouTube 動画のサムネイル画像が人とゴリラの両方を含む場合は、ゴリラを含まない場合より多くの視聴回数と「いいね数」を獲得する傾向がみられました。しかし、サムネイル画像がゴリラだけを含む場合は、ゴリラを含まない場合と比べて上記のような傾向はみられませんでした。これらの結果は、ゴリラのエコツーリズムにおいて、近距離での人とゴリラのふれあいが、より多くの視聴者の興味・関心を惹きつけることを示唆しています。

3. 波及効果、今後の予定

本研究は、インターネットメディア上の映像の内容と視聴者の反応との関係を分析することによって、エコツーリズムを通じた人とゴリラとの距離のあり方に関する人の期待・欲望とその成因について、メディアの影響も考慮しながら理解を深めた点で重要な成果です。人獣共通感染症等への配慮から、ゴリラのエコツーリズムの現場では、人とゴリラとの間に少なくとも 7m という距離を取る決まりがあるにも関わらず、人とゴリラの「密」な近接を描く映像は人気がありました。このような映像は、より多くの人にゴリラのエコツーリズムに関心を持ってもらえるきっかけとなるかもしれませんが、「ゴリラに近づきたい」、あるいは、「ゴリラに近づかれたい」といった観光客の期待を喚起・増大させ、結果的にルール違反を助長してしまう可能性もあります。さらに、現場で長年議論されてきた観察時のマスク着用（一部地域では、調査実施時点ですでに導入されていました）についても、その正しい実施方法の必要性をさらに強調するべきだと考えています。

このように、情報化が進む現代社会では、インターネットメディア上の映像が、観光現場などにおける人と野生動物の関係のあり方に負の影響を及ぼすこともあります。今後はむしろ、そのような映像をきっかけとして、人と野生動物の間の望ましい距離やそれを守る決まりについて議論が活発になり、ゴリラなど絶滅危惧種が置かれている保全の現状について正しい理解が進むことが求められていると言えます。

今後の展望としては、インターネットメディア上の映像が視聴者の認識・行動にどのような影響を与え、また現場における観光客の認識・行動と野生動物の保全に対してどのような影響をもたらすのかについて、より詳細な研究をおこなっていきたいです。これによって、野生動物への負の影響を考慮したエコツーリズムの持続的発展に貢献できると考えています。

4. 研究プロジェクトについて

本研究は JSPS 科学研究費補助金（課題番号：18J22882）と京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院の支援を受けました。

<研究者のコメント>

コロナ禍にある私たちは、互いに適度な距離を保つようにしておりますが、人とゴリラの間にも適切な距離を保つことが、病気感染リスクを下げるために大切だと考えています。本研究をきっかけに、人とゴリラとの距離のあり方が見直され、両者の共生に貢献できれば幸いです。また、メディアの影響も考慮しながら、エコツーリズムを通じた人と野生動物の関係がどうあるべきかについて、議論が活発になることを願います。

ます。

<論文タイトルと著者>

タイトル： Analyzing the popularity of YouTube videos that violate mountain gorilla tourism regulations
(マウンテンゴリラのエコツーリズムにおける人とゴリラの近接を描く YouTube 映像の人気について)

著 者： Ryoma Otsuka and Gen Yamakoshi

掲 載 誌： PLOS ONE

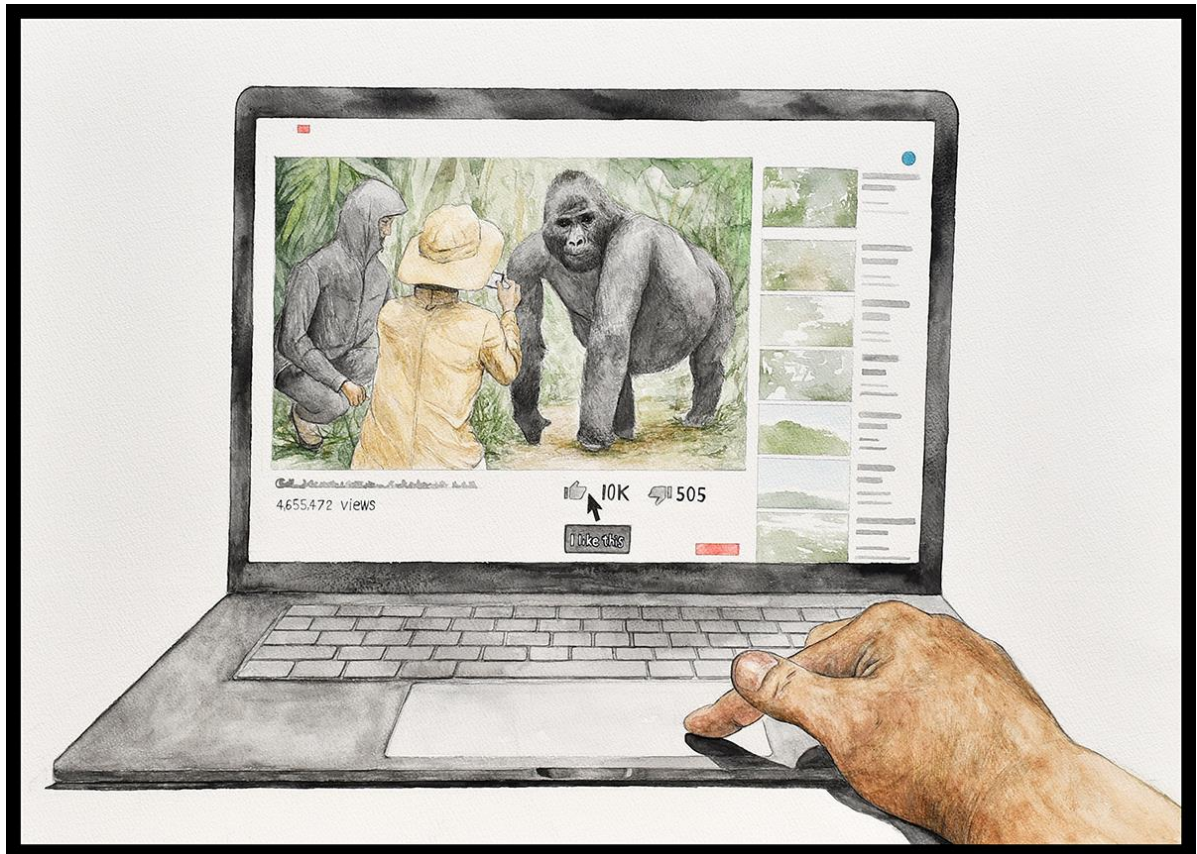
DOI： 10.1371/journal.pone.0232085

<ゴリラの写真>



(写真：大塚亮真)

<イメージイラスト>



(イラスト：山本修路)